

「システム」と「生活世界」概念による 社会の二層的把握の妥当性

横 田 栄 一

J・ハーバマースは『コミュニケーション的行為の理論』（1981）において、後期資本主義社会の現状分析に際して、システムと生活世界による社会の二層的把握を提出した。ここでシステムとは、経済や政治といった、ハーバマースの言うには貨幣や権力という脱言語化されたコミュニケーション媒体によって規制される行為領域、即ち、システム統合が支配する社会の行為領域であり、生活世界とはコミュニケーション的行為を媒介にして再生産される社会の行為領域である。『コミュニケーション的行為の理論』において提出されたこのような社会理論の概念的枠組は、ハーバマースの初期からの、一つには確かに彼のアドルノの批判的克服と関連しつつ遂行された思考経過の一つの結実を示すものであるが、本稿ではこの経過に立ち入ることは出来ない。^①私は、本稿において、「システム」と「生活世界」概念による社会の二層的分析が様々な理論的難点をはらんでおり、先進資本主義社会の現状分析にとっても不十分である次第に立ち入り、ハーバマースの「システム」と「生活世界」という社会理論の概念的枠組を別の枠組にとって代える必然性を示すように試みる。先ず、システムと生活世界に関してハーバマースが言うところをみておかななくてはならない。

1 近代における生活世界とシステムの分離・差異化

ハーバマースは社会進化理論に依拠しつつ、近代に至るとシステム差異化の新しい水準が出現してくると言う。社会の構造的構成諸部分の相互分化は単に生活世界、システムそれぞれの内部で生じるばかりではない。生活世界と政治および経済システムが相互に分化するのである。そして、私見では、まさしくこのシステムと生活世界との相互分化というハーバマース

スの構想がハーバマースの思考にある緊張を、解決し難いように私には思われる理論的困難を惹起するのである。私は、この困難が如何なるものであり、また如何なる経緯から惹起されるのかを見定めておくことにする。この困難の論定を通して、私は、生活世界とシステムというハーバマースの社会の二層的把握を破棄し、代りに後期ウィットゲンシュタインの言語ゲームの哲学に依拠したものとしての言語のパラダイムとマルクスの生産のパラダイムの統合を試みる必然性を示したい。

さて、近代において、生活世界とシステムとが相互に分化し、経済と政治システムは生活世界から自立した行為領域を形成する。実際、「資本の近代的生活史」(マルクス)の展開と共に、それまでは親族関係、政治的・宗教的および人格的諸関係のうちに埋めこまれていた物質的生産の領域は、そうした伝統的・人格的依存関係の制約を打破し、自立的な活動の領域として制度化されて来る。「資本主義は地方的であるとともに伝統的である社会的限界を破壊する。資本主義は生産、人間と自然との質料転換を活動の独立の領域として分離する。その目的は恒常的に成長するレベルで富を産出することである。このことによって資本主義は、人間と自然との能動的な質料転換を生産過程に対して課せられる制限から解放する。」⁽²⁾ が、この物質的生産の独立的な行為領域としての制度化は、新たに国家の近代国家としての再編を促す。これは、M・ウェーバーが世界の脱魔術化と共に進行する世界の合理化として分析した過程でもある。

さて、近代において、ハーバマースの言うように、生活世界とシステムが相互に分化してくるのだとすると、前近代社会の社会構造では生活世界とシステムとが融合していたのでなくてはならない。換言すれば、部族社会や伝統的社会といった前近代社会は、システム理論的概念によって記述可能であると同時に生活世界概念によっても記述可能でなければならない。前近代社会は同時に生活世界であると共にシステムでもなければならず、それ故、前近代社会の分析は、システムの概念と生活世界的概念がいれば融合している社会概念を必要とする。ハーバマースはこのような社会概念として「社会文化的生活世界の保存条件を充足しなければならないシ

システムとしての社会」^③（という暫定的概念）を提出している。ハーバマースによれば、前近代社会にあっては、システムの連関、即ちシステム理論の概念を使用しつつ記述可能な連関は生活世界的連関と分断されてはおらず、生活世界の諸連関と結び付いており、社会内でのシステム分化のメカニズムはそのまま生活世界的パースペクティブから知覚可能である。そのかぎり、社会の機能的・システムの分化は生活世界の構造変換として現象し、行為システムの制度的変換として現象する。諸行為の機能的システムの連関は、生活世界内の制度的枠組と融合している。

生活世界的制度の統一を特徴づける社会統合とシステムの連関の統一を特徴づけるシステム統合とのこの融合は、前近代社会たる部族社会や伝統的社会では以下のような具体的形態を取る。

(a) 部族社会 — これは言語によって媒介され、規範に導かれた相互行為が主要な社会構造をなしている社会である。世界像は制度的秩序に意味統一を付与し、個人の自伝に彼の直接的状況を越える意味を付与する。社会構造は、それ故に、単純な相互行為を越えて行くことができない。相互行為のすべては社会成員達に共通に体験された社会的世界の中で遂行され、彼らの相互行為の意味は彼らに共通に了解されている。部族社会では、生産物交換はいまだ経済的意味を持っておらず、それ故、生産物の交換行為は経済的に動機づけられていない。価値対象は儀礼交換としての交換を通して交換され、それは社会統合に寄与する。

部族社会をシステムとして見ると、それは親族システムとして現われ、性や世代による役割分化のシステムの連関として現われる。ここに作用するシステムメカニズムは環節的分化であり、この環節的分化のメカニズムは親族システムという形態をとって、直接的に生活世界として制度化されている。権力もまだ政治的ゲバルトという形態を持たず、それはもっぱら人望という形態をとって制度化される。

(b) 伝統的社会 — 伝統的社会では、交換関係を通してシステムメカニズムとしての分節的差異化が出現し、また権力関係を介して同じくシステムメカニズムである階層化が生じる。政治的ゲバルトは、今や部族集団の

威信からではなく、市場手段を用いるものとして形成され、これと共に権力システムが親族システムから解放されて国家が組織権力の新たな制度として出現する。システム分化の面から見ると、階層化は一つのシステムメカニズムであって、これは生活世界のパースペクティヴから見ると身分秩序として制度化される。さて、国家的に組織された社会空間の内部で貨幣媒体を介して商品市場が展開するが、しかし、生産諸関係はまだ基本的に政治的秩序と合体しており、宗教的世界像が社会統合的、イデオロギー的機能を引き受けている。親族の代りに国家が社会構造を規定し、官職権威が出現する。商品市場がかなりの展開を見せるとはいえ、それはまだ国家的秩序の枠内を越えて行くことができない。

このように、前近代社会では、システムメカニズムと生活世界的制度とは直接的に融合しており、システムメカニズムは制度として生活世界に係留されている。あるいは換言すれば、システム分化のメカニズムは、生活世界内に直接的に制度化されている。例えば、部族社会では、それは「女性交換や威信形成の規制によって、現存する相互行為と直接に繋がっている。」⁽⁴⁾ システムメカニズムは現存の相互行為の制度として制度化されるわけである。より高度なシステム分化の規制の出現と共に、それ故、生活世界内の制度的秩序として、新たな相互行為秩序が形成される。

ところが、システムメカニズムと生活世界秩序とのこの直接的融合、つまりシステムメカニズムがまだ生活世界の構造に寄生しつつそれと融合しているというこの事態は、社会の近代社会への移行と共に解体してしまう。というのは、近代においては、政治および経済システムが生活世界から自立化して、独自の運動を開始し、システムと生活世界が、従ってシステム統合と社会統合が相互に分断されるとされるからである。そして、私見では、まさしく近代における生活世界とシステムの分断という把握こそが、ハーバマースの思考にある解きがたい矛盾・2つの思考方向との間の矛盾・抗争が入りこんでくる分岐点なのである。

註

- (1) 差し当たって、Vgl. A. Honneth / H. Joas : *Social Action and Human Natur*, Cambridge Uni. Press, 1988. Chap. 3. Moral evolution and domination of nature. Habermas's theory of socio-cultural evolution. A. Honneth : *Die Geschichtsphilosophische Wende der Dialektik der Aufklärung. Reflexions e. krit. Gesellschaftstheorie*, 1985. (以下“GWDA”によって略記)
- (2) G. Markus : *Entfremdung und Verdinglichung bei Marx und Lukács*, Georg Lukács-Jenseits der Polemiken, Sendler, 1986. S. 89.
- (3) J. Habermas : *Theorie des kommunikativen Handelns* [以下“TkH”によって略記], Band 2. Suhrkamp, 1981. S. 228. (丸山高司他訳『コミュニケーション的行為の理論』(下), 未来社, 1987年, 61頁) 尚, 引用に際しては, 訳は私の文体に合わせていくらか変えることがある。
- (4) J. Habermas : TkH, S. 259 (邦訳, 91頁)

2 二つの思考線

近代におけるシステム差異化の社会形成的動力は、物質的生産の領域から生じてくる。ここで、進化的に社会形成を指導するメカニズムはハーバマスが脱言語化されたコミュニケーション媒体と呼ぶ貨幣であり、この交換媒体によって規制される行為領域が経済システムとして生活世界の規範的統合から解除され、生活世界から自立してくると共に権力媒体を介して近代国家という政治システムもまた生活世界の規範的文脈から解除されてくるとされた。経済システムは、このようなものとして、生活世界から分断され、事象化 (Versachlichung) された行為連関として形成される。近代におけるシステム差異化の水準をこのように把握する時、ハーバマスの思考のうちに、A.ホーネットが指摘していることであるが⁽¹⁾、道具的行為ないし目的合理的行為とコミュニケーション的行為という行為の論理レベルにおける区別をシステム (経済および政治システム) と生活世界 (私的領域とマス・メディアを媒介とした公共性) という社会レベルに、社会存在論的区別として投影するという思考様式が侵入してくる。そのかぎり、システムと生活世界は全社会空間のうちで相互の外に存在する行為領域でなければならないことになる。⁽²⁾ そしてこれが、ハーバマスの後期

資本主義社会の分析モデルとなるのである。実際、ハーバマースはこの思考方向に従いつつ、システムと生活世界、即ち、一方で経済および政治システムと他方で私的領域（小家族、近隣関係）および公共性（文化経営、出版、マスメディアによって組織化されるコミュニケーション網）との間の交換モデル^③を提出している。これを簡単に見ておこう。まず、経済システムは私的領域から労働の提供を受け取り、これに対して私的領域は経済システムから貨幣を受け取る。しかし、こうした生活世界とシステムとの交換が可能となるためには、具体的労働はそれ自身で抽象的労働へと変換されなければならない。具体的労働の抽象的労働への転化が以上の交換が成立する上での可能性の条件をなす。他方、経済システムは私的領域に対して消費財貨を提供し、私的領域は経済システムに対し使用価値志向を提供する。が、使用価値志向が消費財貨と交換可能であるためには、使用価値志向は需要の選択性へと変換されなくてはならない。ここで経済システムの成員——これは私的領域から出てくる——の役割は被雇用者としての役割であり、私的生活領域の成員の役割は消費者としてのそれである。次に、政治・行政システムと公共性という生活世界領域との間には以下の交換関係が成立している。即ち、政治・行政システムは公共性から税をインプットとして受け取り、その代りに公共性に組織役務をアウトプットとして提供する。他方公共性と政治・行政システムは相互に政策決定と大衆の忠誠心を交換する。なるほど、政治・行政システムの遂行する業務がますます形式的手続に依存するようになってきているのだとしても、政治・行政システム（支配秩序）は、最終的にはその正統性を持たなくてはならないのであり、この正統性は大衆の忠誠心という形で、形式民主主義制度を通して調達される。

ハーバマースはこの交換モデルを手にして、後期資本主義社会の様々な現象、例えば、国家による経済領域で生じてくる危機回避戦略や大衆民主主義、福祉国家の構造的ディレンマ、資本蓄積の要請と労働者の生活水準の一定の上昇化と安定化との間のディレンマを説明するが、これに私はここでは立ち入らない。ここで確認したいのは、ハーバマースが道具的行為

とコミュニケーション行為の区別を社会次元に、経済・政治システムおよび生活世界として投影し、両者を全社会空間内で相互に「外」にある行為領域として把握しているという点である。そうとすれば、この場合、ハーバマースはシステムは生活世界にその同化圧力を及ぼし、生活世界の生活世界たる固有の論理、即ち、コミュニケーション的行為を媒介にする諸主体間の行為調整を破壊して、生活世界を己のものに包摂する効果を及ぼすと主張する（生活世界の植民地化のテーゼ）のであるが、システムのこの同化作用は、生活世界の（社会空間的意味で）「外」から生活世界に行使されると理解しなければならないであろう。

ところが、ハーバマースには上で見た思考様式と矛盾するように思われる今一つの思考方向がある。それがシステム分化のメカニズムは生活世界の中で制度化されなければならないという彼の主張である。ハーバマースは次のように主張している。「社会組成はさまざまな制度の複合によって規定されているのであり、この制度複合が、その都度進化的に新たに登場するシステム分化の規制を、生活世界に係留する。したがって、環節的分化は親族関係の形で制度化され、階層化は身分秩序の形で制度化され、国家組織は政治的支配の形で制度化され、最初の制御媒体は私的な法人格相互の関係という形で制度化される。この4つのシステム分化にそれぞれ対応する制度は、性や世代による役割、血統集団の身分、政治的官職、および市民的私法である。」⁽⁴⁾ こうして、貨幣や権力といった脱言語化された制御媒体は、それに対応する制度として生活世界のうちで制度化されなければならない。制度は生活世界に属する。してみると、ちょうど、部族社会において環節的分化というシステムメカニズムが親族構造という形態で制度化されるように、最初の制御媒体たる貨幣は市民的私法という形態で生活世界内において制度化されなければならないわけである。すると、例えば貨幣という脱言語化されたコミュニケーション媒体によって制御されるシステム、即ちシステム統合によって規制されるシステム（経済システム）は、それが制度化されているかぎりでは、生活世界に属していなくてはならないことになる。即ち、私的な法人格相互の関係（態）は、生活世界

内的関係（態）でなければならない。システムメカニズムの生活世界内の制度化という思考方向を、先に言及された思考方向（これを私は第1の思考方向と呼ぶ）との区別において、第2の思考方向（ないし思考様式）と呼ぼう。この思考様式の下では、例えば、貨幣という制御媒体によって規制される行為領域としての（経済）システムは、同時に私的法人格相互の関係（態）、つまりこうした制度として、生活世界にいわば頭を出しているのではなければならないことになる。してみると、経済システムそれ自身が一方ではシステムであると共に、他方では生活世界でもあるというその二重性において把握されなければならないことになる。実際のところ、ハーバマースは、この第2の思考方向に従っているのであって、このことはハーバマースが、近代社会では、制御媒体によって規制されるシステムが生活世界の規範的統合から解除されて、生活世界から独立した目的合理的経済行為と行政行為の領域というという部分システムが形成されるとした後で、「それと共に、生活世界は社会システム全体の存続を規定する部分システムであり続けている。それ故、様々なシステムメカニズムは、生活世界に係留される必要がある——つまりそれらは制度化されなければならない」⁶⁾と述べていることから窺うことができる。近代社会では、目的合理的行為システムが、いわば第2の自然として、没規範的な交換過程と権力過程によって制御された形式的に組織化された行為領域として、事象化された連関として凝固し、生活世界的文脈から解除されるとすれば、生活世界はそうしたシステムと並ぶ一つのシステムへと縮小せざるをえなくなるが、しかし同時に生活世界は、ある意味で社会全体であり続けている。というのは、システムメカニズムが生活世界内にその頭を出していることになるからである。

しかしながら、第1の思考方向と第2の思考方向とは相互に矛盾しており、相互に無化しあう。第1の思考方向に沿って思考するならば、近代における生活世界とシステムとの、従って社会統合とシステム統合との分断によって、生活世界とシステムは社会空間内で相互に外にある行為領域として表象される。即ち、一方で経済および政治・行政システムと他方で、

私的領域（小家族や近隣諸関係）と公共性とである。この時、貨幣や権力といった制御媒体、そしてまたシステムメカニズムの生活世界内制度化は理解不能なものになるように思われる。というのは、例えば、貨幣という制御媒体、交換というシステムメカニズムが生活世界、即ち、小家族や近隣諸関係、公共性の領域において私的法人格相互の関係として制度化されるというのはどういうことなのだろうか。この「事態」は、私には意味をなさないように思われる。それというのも、市民的私法という形態をとって、つまり私的法人格相互の関係としてあるのは、つまり制度化されているのは、経済システムそれ自体でなければならないはずだからである。こうして、第一の思考方向は第2の思考方向を無化し、破棄する。

同様に、第2の思考方向は第1の思考方向を無効にし、これを破棄する。第2の思考方向を取って思考するとしよう。この時、脱言語化されたコミュニケーション媒体たる貨幣を通して規制されるシステム連関は、市民的私法という形態で生活世界において制度化されるということになり、経済システムは、一方で貨幣という操縦媒体によって制御されるシステムでありながら、他方で同時に、私的法人格相互の関係として、即ちこのような制度として、生活世界の社会として、生活世界内的存在となる。ハーバマースが、近代において「……法は表面上いかめしい外面的な威力になっていくので、国家的な制裁力に基く近代の強制法は、法仲間の倫理的動機から分離されて、法に対する抽象的な服従を命じる制度になってしまう。こうした発展は、生活世界の構造的分化の一部である——生活世界の中の社会という構成要素の自立化、つまり文化や人格に対する制度システムの自立化や、また正統的な秩序が、規範定立や根拠づけの形式的な手続にますます依存するようになっていくという趨勢が、そうした発展に反映している。」^⑥と述べていることからすれば、同一のことが政治・行政システムにも当てはまることが分かる。経済システム自体がその二重性において見られるのと同様、政治・行政システム、ウェーバーが近代における官僚制的合理化の典型的局面として分析したこのシステムが、権力という制御媒体によって規制され、制御されるシステムでありながら、同時に、生活世

界内の制度として定立される。生活世界内の社会という構成要素は、我々が第2の思考方向を採って思考するかぎり、あくまで制度として、生活世界の構造的分化の結果として、生活世界内の行為領域でなくてはならない。してみれば、システム自体が同時に生活世界に所属するのであるから、全社会空間内での、一方で政治および経済システム、他方で私的領域と公共性というという意味でのシステムと生活世界の分断の表象は破棄されることになる。私見では、ハーバマースでは、以上2つの、相互に矛盾し、無効にしあう2つの思考方向がそれと意識されずに混在しているのである。

註

- (1) Vgl. A. Honneth : GWDA, S. 323.
- (2) ハーバマースは社会的行為を大きく、コミュニケーション的行為と戦略的行為に分類している。(Vgl. J. Habermas : TkH, Band 2, S. 446. 藤沢他訳『コミュニケーション的行為の理論』(中), 78頁) また, Vgl. J. Habermas : Was heißt Universalpragmatik ? *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1984, S. 405. および Aspekte der Handlungs-rationalität, ibid., S. 462.) 言うまでもないが、ハーバマースの理論の行為論的基礎はコミュニケーション行為に尽きるわけではなく、ましてや理想的コミュニケーション状況の概念に尽きるわけでもない。それ故にまた、討議倫理に尽きるものでもない。ハーバマースは、ルーマンがそのシステム論をもってそうするように、『コミュニケーション的行為の理論』で提出された理論の全体でもって、つまり「システム」と「生活世界」をもって現代社会の諸現象を説明しようとするのである。問題なのは、この説明が妥当かどうか、あるいはどのくらい妥当かということである。
- (3) これはハーバマースにとって、後期資本主義社会の分析モデルをなすものである。勿論、これは一定の説明力を持っている。
- (4) J. Habermas : TkH, Band 2, S. 249. (邦訳(中) 84頁)
- (5) J. Habermas : TkH, S. 230. (邦訳(中) 67頁)
- (6) J. Habermas : TkH, S. 261. (邦訳(中) 94頁)

3 ハーバマースに対する2つの解釈

さて、ハーバマースの思考に内在している以上の相互に無効にしあう2

つの思考方向のいずれか一方に止目するということによって、システムと生活世界の関係に関するハーバマースの所論に対し、2つの相互に異なる解釈が生まれてくる。私は、ここで、こうした2つの解釈として、A. ホーネットとD. イングラムの解釈を見ておくことにする。

(a) ホーネットの解釈。ホーネットは、第1の思考方向に従ってハーバマースの所論を解釈している。即ち彼は、既に言及したように、ハーバマースは道具的行為とコミュニケーション的行為という行為構造的区別を、つまりこれら2つの行為類型をいわば物象化して、社会的再生産の具体的領域に投影したものと見ている。すると、社会内において、道具的行為が投影された行為領域、即ち政治及び経済システムとコミュニケーション的行為が投影された生活世界が相対することになる。システム、即ち目的合理的に組織化されたシステムは、道具的行為即ち目的合理的行為が支配的な行為領域であり、これに対して生活世界はコミュニケーション的行為が支配的な社会領域である。こうして、システム、目的合理的行為システムは規範から解除された行為領域として現われる。経済及び政治システムと生活世界は、この解釈のもとでは、社会的再生産の相互に異なる領域、全社会空間内で相互の「外」にある行為領域である。しかし、このことによって、ハーバマースの所論に、あるフィクションが生れてくる。即ち、目的合理的行為システムに固有な社会闘争の次元が、つまり「目的合理的行為の組織形態を巡る社会集団の闘争」⁽¹⁾ という社会的行為の特有の次元がシステムから抜き去られてしまう。というのは、システムとは規範的に中性化された行為領域とされるからである。確かに、『コミュニケーション的行為の理論』では、労働と相互行為という2つの行為類型が直接に対置されているわけではない。これらの社会的行為は、それが社会的に調整されるメカニズムを手掛かりにして区別される。けれども、ハーバマースが記号的再生産と物質的再生産を頑なに対置することによって、「実際にはそれに対応するものを殆ど見つけることのできないような区別」⁽²⁾ が社会的再生産の領域に持ちこまれる。ここに言われる区別とは、規範から自由な行為領域と権力から自由な行為領域とのフィクション的区別である。これは次の

ホーネットの批判を呼び起こす。即ち、記号的再生産と物質的再生産といういずれの再生産領域も「個々のコミュニケーション過程あるいは共同過程を一つの網へと結合することによって、それらが全体として記号的再生産ないし物質的再生産のそれぞれの機能を満たすことができるようなメカニズムを必要としているのである。が、この種のメカニズムは、いずれの場合にも制度を表わしており、そこでは、その都度の行為遂行が、それぞれ社会の自立化の度合に応じて、民主的な取り決めに基き、あるいはまた支配に後続された指図のもとでサンクションを受けることで、規範的に、つまり生活世界に貯蔵されている主体の行為志向と結び付いて、長期的なものとして定立されているのである。……」⁽³⁾ どちらの場合にも「制度の形成は、社会集団の間で了解ないしは闘争という形で行われるコミュニケーション過程の結果である。」⁽⁴⁾ という批判である。⁽⁵⁾

(b) 以上のホーネットの解釈に対して、D. イングラムはそれと対照的な解釈をしているように思われる。イングラムは、システム統合と社会統合、それ故にまたシステムと生活世界の近代における分断というハーバマースの主張を、同一の社会領域に対する2つの見方に言及するものとして理解するという方法論的解釈を提出している。ハーバマースは、例えば前近代社会たる部族社会では、環節的分化というシステムメカニズムは、親族構造という形態で、社会文化的生活世界として制度化されていると述べていた。してみれば、同一の社会、ここでは部族社会がシステムメカニズムによって制御されるシステムとしても社会的規範によって統合されている(社会-文化的)生活世界としても把握できることになる。イングラムは次の様に言っている。「彼[ハーバマース]の読み方では、システムは生活世界の内部で、行為の意図されない結果として生みだされ、規範的意味で生活世界に係留される。それで、生活世界とシステムを制度内でオーバーラップする論理的に区別された機能に関係するものと見なすのが最もよいであろう。」⁽⁶⁾ この方法論的読み方では、如何なる行為も2つのパースペクティヴから見られることができるということになり、如何なる行為領域もシステムとしても生活世界とも見られることになる。してみると、ハーバ

マースが経済システム、政治・行政システムと呼ぶ行為領域も2つのパースペクティブから、即ち貨幣や権力という制御媒体によって統合されるシステムとしても、また一定の規範、法規範によって統合（これは社会統合ということになる）される生活世界とも見られることになる。これは、ハーバマースの第2の思考方向と合致するであろう。というのは、例えば貨幣という脱言語化されたコミュニケーション媒体によって制御されるシステムは私的法人格相互間の関係として生活世界内において制度化されなければならないとされていたからである。この方法論的読み方にハーバマースにおいて対応しているのが、意味と規範のコミュニケーション網に参加するコミュニケーション参加者のパースペクティブと行為連関を意図されない結果という視点からみる観察者のパースペクティブとの区別である。そしてこの生活世界とシステムとの方法論的区別は、生活世界とシステムの存在論的区別を伴立しないはずである。

とはいえ、イングラムはこの方法論的読み方⁽⁷⁾がハーバマースの見解に直接一致しないことを意識している。というのは、ハーバマースには第1の思考方向、即ち、生活世界とシステムの社会内での分離、存在論的分配という理解もあるからである。イングラムは第1の思考方向と第2の思考方向とは、イングラムの用語では生活世界とシステムとの存在論的区別と方法論的区別とは少なくとも調和するであろうとして次のように述べている。

「経済的管理システムを生活世界の民主的エトスへと再統合するというハーバマースの望みが与えられるならば……生活世界とシステムとの差異化は、……すべての社会によって遂行されるべき統合機能間の論理的な区別を指示するばかりではなく、同様に、その可能性が最初に生活世界の合理化によって確立される進化的達成——行為の異なる領域への存在論的分配——に言及するものと解してよい。」⁽⁸⁾

これはハーバマースの思考に内在する上記の矛盾・抗争を調停する試み、あるいはむしろ、イングラムの用語で言えば、方法論的区別と存在論的区別を相互に矛盾しないものとして把握する試みであるが、しかしこの

ことによって、イングラムの視野からこの矛盾の意識が消失する。

註

- (1) A. Honneth : GWDA, S. 296.
- (2) A. Honneth : GWDA, S. 323.
- (3) A. Honneth : GWDA, S. 323.
- (4) A. Honneth : GWDA, S. 323.
- (5) とはいえ、勿論、ホーネットはハーバマースに今一つの思考線があることを知らないわけではない。ホーネットは方法論的読み方が、ハーバマースにおいて生活世界とシステムの事實的2元論に変わってしまうのだと言っている。Vgl. A. Honneth : GWDA, S. 324.
- (6) D. Ingram : *Habermas and The Dialectic of Reason*, Yale Uni. Press, 1987. p. 116.
- (7) T.マッカーシーも同様の解釈をしている。T. McCarthy による TkH, Band 1 の英訳 (*The Theory of Communicative Action. Volume One*, Boston Press, 1984.) への introduction を参照。
- (8) D. Ingram : *ibid.*, p. 117.

4 「生活世界」概念と「システム」概念の2義性

私見では、近代におけるシステムと生活世界の分断ないし生活世界からのシステムの自立化（この際、生活世界とシステムは、近代において、社会空間内で相互の外にある社会領域として分化するという表象が採用されている）というテーゼ（第1の思考方向）とシステムないしシステムメカニズムは生活世界内的制度として生活世界において制度化されるというテーゼ（第2の思考方向）とは相互に矛盾し、相互に無化し合う。もし我々がここで、実際ハーバマースがそうしているように、上記2つのテーゼを維持し、尚かつ矛盾を回避しようとするれば、このことはある代償を払う。即ち、それは「生活世界」概念と「システム」概念の両者が二義的になるという結果をもたらす。この時、かの矛盾は両概念の二義性となって現象するのであって、実際、ハーバマースは両概念を明示的に言及せずに二義的に用いているのである。次にこの経緯を見よう。

ハーバマースは言う。「社会統合にとって欠くことのできない言語によ

る了解のメカニズムは、形式的に組織された行為領域においては、一部効力を失い、制御媒体がその代りをする。この制御媒体は言うまでもなく、形式的法という手段を用いて生活世界に定着していなければならない。」^①システムの制御媒体が形式法を手段として生活世界において制度化されるということは、貨幣媒体の制度化は、市民的私法による私的法人格の関係態として、それ故、法を通して形式的に組織された行為領域として確立されるということを意味する。このことは国家についても同様である。近代において法は私法と公法に分離する。国家は公法による権力媒体の制度化として生活世界内の制度として形成される。すると、生活世界は、一方で、一つの意味では、このように形式的に組織された行為領域の外なる世界であると共に、別の意味では、形式的に組織化された行為領域がまさしく貨幣や権力といった制御媒体の生活世界内の制度化である故、生活世界は形式的に組織化された行為領域を包括する。前者の意味での生活世界を「生活世界Ⅰ」と呼び、後者の意味での生活世界を「生活世界Ⅱ」と呼ぼう。

「システム概念」もまた二義化される。システムは、一つの意味では、制御媒体によって制御される行為の機能的連関であり（その制度化は生活世界に所属する）、他の意味では、制御媒体によって制御されながら、同時に法を通して形式的に組織化された行為領域がシステムと呼ばれる（このシステムは生活世界の外にある社会領域である）。前者の意味でのシステムを「システムⅠ」、後者の意味でのシステムを「システムⅡ」と呼ぼう。

生活世界Ⅱ並びにシステムⅠを見してみるならば、法、即ち（市民的）私法や公法を通して形式的に組織された社会領域は、生活世界内制度であり、これに対してシステムⅡ並びに生活世界Ⅰを見してみるならば、形式的に組織された行為領域（ないし社会領域）は生活世界外の行為領域である。こうして、「生活世界」と「システム」のそれぞれの二義性は「形式的に組織された社会」という概念の二義性として反映する。というのは、それは一方では、生活世界内制度であるが、しかし他方では生活世界外的システム（経済及び政治・行政システム）でなければならないからである。この点からすれば、「われわれの見るところ、ハーバマースにおける『法制化

(Verrechtlichung)』と『生活世界の植民地化』との関係は、重要なポイントでありながら、かなり曖昧なところを残している。というのも、ハーバマースの社会理論において、『法』の理論的な位置が、システムと生活世界とを媒介とする『メディア』なのか生活世界の規範的価値領域が制度化したものなのか明確でないのである。ハーバマースはシステムを経済と政治に限定するわけだが、そのことにより『法システム』はその固有な理論的位置価値を喪失するように見える。」⁽²⁾ という中野敏雄氏の発言は興味深いものとなる。確かに、システムを経済と政治システムに限定してしまえば、「法システム」はその固有な位置価値を喪失してしまう。とはいえ、私がここで問題とするのは、「法」ないし「法システム」の理論的位置価値ではない。私がここで問題としたいのは、このような法（実定法）に則して組織化された行為領域ないし社会、私的法人格相互の関係態、こうした場の理論的位置価値であり、ハーバマースが「形式的に組織されていると私が言う時、それは媒体によって制御されたサブシステムの中に現れてくる社会関係——しかも実定法を通して始めて創出されるような——のすべてを含む。従って、その範囲は組織を越えて広がった私法・公法上の交換関係や権力関係にまで及ぶ」⁽³⁾ と語る際に言及している形式的に組織された行為領域ないし社会である。この行為領域ないし社会は、ハーバマースにおいて二義的性格を持っており、それ故、それがシステムなのか生活世界なのかが分からなくなるという事態を惹起するのである。システムと生活世界との媒介という点に関して言えば、形式的に組織された行為領域、即ち法的に構成された行為領域は、その二義性によってシステムと生活世界とを媒介する位置価値をもたらされている。（とはいえ、このような「媒介」は理論的不整合と称されるべきものであるが。）即ち、この形式的に組織された行為領域は、一方で、貨幣や権力という制御媒体の生活世界的制度化として生活世界に所属すると共に、他方では、制御媒体によって制御されたシステムであると同時に実定法を通して形式的に組織された社会であるという両面性を持ちつつ生活世界外のシステムとされるからである。

以上見たように、「生活世界」概念と「システム」概念の、それ故にまた

「(実定法を通して) 形式的に組織された社会」概念の二義的性格は、私見では、ハーバマースの生活世界とシステムによる社会の二層的把握の基本概念レベルにおける混乱を示すものである。そしてもし我々が「システム」概念と「生活世界」概念のハーバマースの使用は二義的ではなく、一義的なのだと仮定するならば、このことは即座に第一の思考方向と第二の思考方向との間の矛盾＝相互に無化しあう関係を顕在化させるであろう。以下に見るように、マルクスの物象化概念のハーバマースによる再定式化、即ち、システムによる生活世界の植民地化のテーゼによる再定式化は、その出発点において、この矛盾の現象形態たる概念の二意義的使用に依拠しているのである。

註

- (1) J. Habermas : TkH, Band 2, S. 458. (邦訳 (下) 295 頁)
- (2) 中野敏雄「法秩序形成の社会学とその批判的潜在力」, 『思想』 No.765, 1988 年。119 頁。
- (3) J. Habermas : TkH, Band 2, S. 458. (邦訳 (下) 295 頁)

5 物象化概念のハーバマースによる再定式化及び生活世界の植民地化のテーゼ

ハーバマースは、近代において、二つの行為調整メカニズムが、従ってシステム統合と社会統合が、それ故にまたシステムと生活世界が相互に分断され、分化すると述べていた。この時、システムは生活世界的な規範的、倫理的、文化的意味連関から解除され、没規範的な、いわば第二の自然として、事象化 (Versachlichung) された行為連関として現われるとされる。「社会システムは、生活世界的地平を決定的に粉碎し、コミュニケーション的日常実践の先行理解から遠ざかる。」⁽¹⁾ けれども、この事象化された行為連関は、いまだ物象化 (Verdinglichung) された行為連関ではない。ハーバマースは事象化と物象化とを概念上区別しているのであって、生活世界とシステムとの分断という事態はそれだけではまだ物象化ではな

いのである。むしろ、この分断は近代そのものに内在する二つの可能性を示している。即ち、「確かに、システム統合と社会統合とが著しく分断されている」ということの事実だけからは、いずれかの方向での直線的な従属関係は帰結することはない。いずれの方向での従属関係をも考えることができよう。即ち、貨幣や権力のような制御メカニズムを生活世界に係留する制度は、形式的に組織化された行為領域に対して生活世界が影響を与える道を切り拓くと考えることができようし、あるいは逆にコミュニケーション的に構造化された行為連関に対してシステムが影響を与える道を切り拓くと考えることができよう。前者の場合には、そうした制度は、システム保存を生活世界の規範的制限に従わせる制度的枠組として機能し、後者の場合には、生活世界を物質的再生産のシステムの強制に従属させ、こうしてそれを併合するような土台として機能するのである。」⁽²⁾ ハーバマースの考えでは、近代以降の社会的合理化の過程は、この近代そのものに内在した可能性の一面的・選択的実現だったのであり、システム維持の強制命令が生活世界の内的論理を浸食し、生活世界を己の元に併合した過程だったのである。これを別様に言えば、認知的・道具的合理性の一元的貫徹、それがコミュニケーション的合理性を破壊するに至るということである。この事態が生活世界の植民地化のテーゼで意味されることであり、物象化とはシステムによる生活世界の浸食という事態である。マルクスの物象化概念のハーバマースによる再定式化に内在する問題性については以下において立ち入るが、ここでまず注意すべきなのは、近代に生み出された可能性としての、生活世界のシステムへの、あるいはシステムの生活世界への従属の論定は、中野氏が指摘した「法」の理論的位置価の曖昧性と「形式的に組織された行為領域」の既に言及した二義的使用に基いているということである。確かに、上のハーバマースからの引用を見ると、「市民法」（という土台的制度）はシステムと生活世界とを媒介する位置を占めている。しかし、この法、実定法という制度がシステムと生活世界とを媒介することが可能とされるのは、「貨幣や権力のような制御メカニズムを生活世界に係留する制度」⁽³⁾ たる法（＝実定法）を通して形式的に組織された行為領

「システム」と「生活世界」概念による社会の二層的把握の妥当性

域が、制御メカニズムの生活世界内の制度化として生活世界に属しているとされると同時に、他方では、制御媒体たる貨幣や権力によって制御される機能的連関でありつつ法的に、つまり形式的に組織される行為領域が生活世界外のシステムとされているからである。

ハーバマースは、「システム」や「生活世界」、「形式的に組織された行為領域」といった概念の二義性に明示的に言及せず、このことによって、私の見るところでは、この二義性をいわば強引に隠蔽している。が、ハーバマースが（後期資本主義社会における）システムと生活世界との間の交換モデルを提出し、システムによる生活世界の植民地化が如何なる事態であるかを解明する時、彼が「[近代において] これまで伝統的に慣れ親しまれてきた行為のコンテクストは、システムの境界世界へと追い出されてしまう。こうした規準に従うと、システムと生活世界とを画する境界線は、一方で経済と官僚制的な国家行政というサブシステムと他方で、（家族、近隣関係、自由結社に支えられた）私的生活領域及び（私人と公人とに支えられた）公共性との間に引かれることになる」⁽⁴⁾ と述べていることから理解されるように、システムは制御媒体によって制御される行為の機能的連関と法を通するその形式的な組織化の全体（経済及び政治・行政システム）とされ、生活世界は社会空間的にシステムの外なる私的生活領域と公共性とされている。そしてまさしくこのことによって、ハーバマースは道具的行為とコミュニケーション行為という行為の論理上の区別を異なる社会次元に投影し（イングラムの言葉では、これは存在論的分配を意味する）、このようにして、システムそれ自体から社会抗争の固有の次元を捨象したというホーネットの批判がはやりハーバマースに適中してくる。実際、システム複合性の増大も生活世界とシステムとの分断もそれ自体では何等病理現象を、つまりは物象化を意味せず、病理現象は、これまで行為調整メカニズムとしての了解に依存してきたがために苦痛を伴わずには貨幣や権力の媒体に電極を切り替えられることができない生活世界領域に経済的合理性の諸形態が侵入する時生じるという理論構成を採用するかぎり、システムそれ自体には、なるほどそれが事象化された行為領域ではあっても、物象化

現象は措定されなくなる。R.ダンネマンは、ハーバマースは経済的・管理的行為領域に目的合理性を、生活世界にコミュニケーション的合理性を割り当てることによって、必然的な目的合理性と病理的な副次的作用とを区別したいのだ、と言っている。⁽⁵⁾ ダンネマンのこの指摘を念頭に置いて言えば、ハーバマースは、道具的行為をシステムへ、コミュニケーション的行為を生活世界に関係づけることで、近代におけるシステムと生活世界の分断を進化的に必然的と見なし、システムによる生活世界の植民地化を病理的な副次作用と見なしているということになる。それ故、ハーバマースでは道具的行為（目的合理的行為）それ自体は概念上物象化と関連はないのである。この点で、それは例えばホルクハイマーの道具的行為ないし道具的理性とは意味が相違する。ホルクハイマーでは、理性の道具的理性、即ち主観的理性への転化こそが物象化に他ならない。⁽⁶⁾

ハーバマースが提出する生活世界とシステムとの交換モデルは、これは後期資本主義社会における生活世界の植民地化や階級妥協の状態を説明するべく意図されているものであるが、ハーバマースの言う物象化が如何なるものであるかを明らかにしてくれる。ハーバマースの分析では、既に触れたように、生活世界の諸個人は経済システムとの関係では、被雇用者と消費者の役割を引き受け、国家システムとの関係では、国家に形式民主主義的制度を通して正統性認証を付与するということと引き換えに、クライアントの役割を引き受ける。諸個人がこうした役割を引き受けるということを通じてシステムと生活世界との間に交換関係が成立し、更にこの交換関係の成立を介して、ハーバマースによれば、システム論理が生活世界を浸食していく。即ち、目標やサービス、生活時間や生活空間の貨幣化、責任・依存関係の官僚制化、生活態度の一面化、官僚制化による政治的公共性の枯渇が進行する。こうした現象をかつてウェーバーは、意味喪失のテーゼによって把握し、その原因を実体的理性の解体に帰したのであるが、ハーバマースはこれらの現象を生活世界の植民地化のテーゼによって説明する。ハーバマースの見るところでは、生活世界の植民地化は、私的生活態度からばかりではなく、政治的公共性からも道徳的＝実践的要素を

排除して行くと共に、日常生活態度が功利主義的、専門主義的に一面化され、「消費志向の立場と所有の個人主義が仕事や競争の動機にまで浸透してくる」⁽⁷⁾ といった事態を惹起する。のみならず、生活世界の植民地化のテーゼは、フーコーが発見した政府・経済・文化的権力効果の網細血管をも、即ち、環境操作、廃棄物の官僚的管理、教育の規範化と層化的特徴、システム集中と情報コントロールの内で働く権力効果をも、またレジャー時間や文化の商品生産の法則への包摂化、あるいは大衆消費の法則への包摂化、家族の大企業命令への恒常的適合、更には専ら生活設計のために学校を使用することをとも包括している。⁽⁸⁾ だからまた、アドルノとホルクハイマーが「文化産業」という概念によって捉えようとした現象をも。『啓蒙の弁証法』において、社会化された諸個人の人格性の崩壊、全体主義国家群の形成、個人の欲求を操作する文化産業の発展という歴史的趨勢の中で、「何故に人類は人間的な状態に入りこむ代りに新たな種類の野蛮へと落ち込んで行くのか」⁽⁹⁾ という問が発せられる。西洋文明総体の過程たる啓蒙の弁証法は、文化産業と共に今や大衆欺瞞の状態に入りこむのである。⁽¹⁰⁾)

これらの現象がハーバマースによれば物象化（ないし生活世界の病理）現象なのである。ルーマンのシステム理論は、近代社会を生活世界と関連を付けることなく専らシステム複雑性という観点から把握するために、コミュニケーション的に構成された行為領域の構造的諸特性から読み取られるはずの病理現象に対して理論上鈍感になり、生活世界の病理的歪曲、即ち物象化現象が視野から脱落してしまう、とハーバマースは言っている。確かに、システムによる生活世界の植民地化のテーゼに基く物象化現象の理解は、物象化現象を単に経済システムにのみ論定することに比べれば、物象化を（差し当たって）一層広い領域に論定し、それ故にまた経験的研究の主題にできるという利点を持っている。その上、ハーバマースの物象化概念、即ちシステム維持の強制命令による生活世界の植民地化による物象化の説明は、生活世界の病理現象をシステムによる生活世界への浸食という一つの論理で説明できるのかどうかという問題はあるとはいえ、直接

に階級問題に還元できるわけではない、現代社会における諸々の社会問題を視野に登らせる。実際、ハーバマースが生活世界の植民地化のテーゼによって論定する社会病理・社会問題は、後期資本主義社会に特有の、直接に階級に特殊的ではない物象化現象、新しいタイプの社会問題であり、新しい社会運動はこうした新しいタイプの社会問題に対する応答として生活世界の物象化の表現なのである。⁽¹¹⁾ しかしながら、システムと生活世界という社会の二層的把握、加えてシステムによる生活世界の浸食による物象化の説明は、論理必然的にハーバマースの思考にある強制を課する。即ち、このような理論構成を採る限り、システムそれ自体には物象化という事態は決して措定されないということである。それ故、物象化概念のハーバマースの再定式化は、物象化概念を、差し当たってマルクスの物象化概念を一層広い社会領域に拡大するように見えながら、他方では、その適用領域に制限を加えている。こうして、ハーバマースは次の様に言う。即ち、階級闘争は社会国家的妥協の中で鎮静化されてしまったがために、社会抗争はもはや物質的再生産の領域では発生せず、「新たな抗争は、システムと生活世界の接点において発生している」⁽¹²⁾ のであり、それは「分配の問題ではなく、生活形式の文法が火種となって燃え上がるのである。」⁽¹³⁾ こうして、システムと生活世界の二層的把握及びシステムによる生活世界の歪曲による物象化の説明という理論構想それ事態が、当然にも、「彼〔ハーバマース〕は、その二元論のために、経済及び政治的領域を物象化論から引き離した」のであり、「近世の抵抗運動の内容に耳を貸さ」ず、それ故、ハーバマースの理論では「労働者自主管理や協議民主主義は放棄されざるを得な」くなり、この点で批判理論の伝統におけるラディカルな性格を放棄した、即ち脱ラディカル化した⁽¹⁴⁾ という批判を呼び起こす。ここですぐに考えつく代案は、経済システムそれ事態が物象化的存立構造を有しているのだという観点であろう。実際、ダンネマンも（経済システムにおける）「生産手段と制度の分離ないし自立化がそれ自体で物象化的効果を有しているのだ」⁽¹⁵⁾ と主張している。だが、この点については私は後に立ち入ろう。次に、私は社会の二層的把握を基礎にする物象化のハーバマースによ

る説明が物象化（即ちシステムによる生活世界の植民地化）の推進メカニズムの解明に際して理論的困難に遭遇するという点に論及しよう。

註

- (1) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 258. (邦訳 (下) 92 頁)
- (2) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 275. (邦訳 (下) 108 - 9 頁)
- (3) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 275. (邦訳 (下) 108 頁)
- (4) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 458. (邦訳 (下) 296 頁)
- (5) Vgl. R. Danneman : Das Verdinglichungsproblem und Habermas' Versuch einer Reformulierung, *Georg Lukács*, hrsg. von R. Danneman, Sendler, 1986. S. 113.
- (6) Vgl. M. Horkheimer : *Kritik der instrumentellen Vernunft*, Ffm, 1977. 1. Mittel und Zwecke.
- (7) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 581. (邦訳 (下) 417 頁)
- (8) cf. D. Ingram : *ibid.*, p.162.
- (9) M. Horkheimer / T. Adorno : *Dialektik der Aufklärung*, S. Fischer Verlag, 1969. S. 1.
- (10) 尚, Zoltán Tar は「[文化産業に関する] 彼等の結論がテレビ時代に先行していたという事実を考慮すると, 我々は著者達 [ホルクハイマーとアドルノ] の洞察と予見を承認しなければならない。」(Z. Tar : *The Frankfurt Schule. The Critical Theories of Max Horkheimer And Theodor W. Adorno*, Schocken Books, 1985. p.83.) と言っている。
- (11) cf. A. Giddens : Reason without Revolution? Habermas's Theorie des kommunikativen Handelns, ed., R. J. Bernstein. Basil Blackwell, 1985. p.111.
- (12) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 581. (邦訳 (下) 417 頁)
- (13) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 576. (邦訳 (下) 412 頁)
- (14) R. Danneman : *ibid.*, p.117.
- (15) R. Danneman : *ibid.*, p.113.

6 物象化の推進メカニズム

ハーバマースは何故にシステムがその限界点を越えて制止不能な固有の力学を発揮し, 社会統合に依拠していた生活世界諸領域を浸食するに至るのかという物象化の推進メカニズムに関する問いを提出している。というのも, 実際, 何が物象化現象として認定されるのかという問いについての

回答は、物象化を推進するメカニズムの説明ではないからである。

ハーバマースは次のように言う。大衆民主主義は階級闘争を鎮静化する調整である、と。疎外された労働と疎外された共同決定がこれを通して体制変革の起爆力を発揮できないようにされるわけである。経済システムは政治・行政システムの介入を受けて、ここに生じる危機傾向は予め緩和されるが、そうしても経済システムの複合性はますます増大して行く。これは形式的に組織化された行為領域の拡大並びに濃密化を意味する。この拡大は生活世界に、とりわけ大量消費に切り替えられた私的家計に影響を与えてくる。疎外された労働と疎外された共同決定の社会国家からの代償は、消費者とクライアントという役割を通して行われる。これらの役割を通して、生活世界の諸連関が機能転換を起こし、システムの統合された行為領域、即ち形式的に組織された行為領域に同化されて行くのである。とすれば、生活世界の物象化は、社会国家的調整の中で進行するわけである。

これは生活世界の物象化の推進メカニズムの説明であろうか。そうではないように私には思われる。むしろこれは、システムが生活世界を浸食して行く経路、道筋の説明である。私見では、ハーバマースの上述の説明は、結局、かの推進メカニズムの作動の結果を叙述しているにすぎず、推進メカニズムそれ事態の説明ではない。もし上のハーバマースの説明がかの推進メカニズムの説明としての意義を持ち得るとすれば、その際効いてくる唯一の点は、経済システムは、その固有の力学によって不断にその複合性を増大させて行くという点である。すると、まだ説明されておらず、また説明されなくてはならないのはこの固有の力学である。では、この固有の力学、経済システムが不断に複合性を増大させて行くその衝撃力はどのように説明されるのであろうか。ハーバマースはこれを説明することができるのであろうか。

ハーバマースは経済システムのこの固有の力学・衝撃力を物象化の概念に依拠して、即ち、資本主義的経済システムにおける、自己増殖的本性を有する資本物神の定立という事態によって説明することはできない。とい

うのも、ハーバマースの思考枠組からすれば、物象化は経済システムそのものにおいては措定されず、システムの複合性増大それ自体も決して物象化現象ではなく、むしろ経済システムの固有力学こそがシステム論理の生活世界への制止不能な浸食を、それ故に（生活世界）の物象化を説明しなければならないからである。しかも、ハーバマースは、決定的に重要な点であるが、マルクスが解明した物象化の概念を自身の物象化概念の一特殊ケースとして把握している。

「[マルクスの] 価値論の、……決定的な欠陥は、生活世界のシステム命令への包摂の一つの特殊なケースを過度に一般化している点にある。」⁽¹⁾
「マルクスは、自らの生産物だけではなく、自らの本質諸力を発展させる可能性までも奪われた目的活動的な行為者のモデルから出発しているために、具体的労働から抽象的労働への転化をシステムによって誘導されて生じた社会関係の物象化現象の特殊ケースとして理解することができなかったのである。」⁽²⁾

このように、ハーバマースはマルクスの言う実在抽象を物象化の一形態、即ち、生活世界のコミュニケーション的構造が貨幣や権力という脱コミュニケーション化された媒体によって制御されたシステムの強制命令に服するという生活世界の物象化の一特殊形態として理解している。勿論、実在抽象は即座に資本物神の定立と同一ではなく、その前提条件であるが、ともあれ、ハーバマースは如上の理解のために、具体的労働の抽象的労働への転化たる実在抽象によって、それ故にまた剰余労働を吸収することによって自己増殖する資本によって、資本主義的経済システムの自己推進力を説明することはできなくなる。何故なら、実在抽象は、むしろシステム論理による生活世界侵食の結果生じる物象化の一特殊形態とされるからである。この時資本主義的経済システムの自己推進力は所与として前提されており、ハーバマースはこの自己推進力を物象化の概念に依拠せずに説明しなければならないはずであるが、しかしこの説明は与えられていない。むしろそれは所与として前提されているだけである。

さて、ハーバマースがマルクスの実在抽象をシステムによる生活世界の

浸食によって誘発される物象化の一特殊形態とすることによって、「生活世界」と「システム」概念に再び二義性が生じてくる。後期資本主義社会におけるシステムと生活世界の交換モデルを展開するに際して、ハーバマースは貨幣及び権力媒体によって制御される行為の機能的連関でありながら同時に実定法を通して形式的に組織された社会領域をシステム（経済及び政治・行政システム）とし、その社会存在論的に外にある行為領域をコミュニケーション的に構造化された行為領域（私的生活領域及び公共性）としての生活世界とする表象に従っていた。けれども、資本主義社会の労働の二重性、即ち具体的労働がそれ自身で同時に抽象的労働に転化するという事態をシステムによる生活世界の植民地化の一特殊形態とするならば、具体的労働の抽象的労働への転化がそこで遂行される労働世界は経済システムに含まれているのであるから、経済システムそれ事態に物象化された生活世界としての生活世界が措定されざるを得ない。物象化がシステムによる生活世界の浸食に起因するとすれば、物象化は生活世界の病理現象として論定されることになるが、この物象化の一特殊形態がかの实在抽象であるために、そしてこの实在抽象は（経済）システムそれ事態の内部で生起するはずであるために、システムによる生活世界の植民地化によって生活世界においてと同様システムそれ事態に物象化が措定されることになるからである。一言で言えば、システムによる生活世界の侵食によってシステムそれ自体に生活世界の病理現象が措定される。それ故、物象化・病理現象は、システムによって浸食された生活世界に生じるはずであるのに、この現象は生活世界を浸食するシステムにおいて生じる。この「矛盾」は、ここでハーバマースが先述の第一のではなく、第二の思考方向に沿って思考していると考えなければ、解消不能であると思われる。即ち、ここでは、資本主義社会の労働は具体的な、換言すれば使用価値を産出する労働としては生産者の生活世界に属しているのであり、資本の命令に従って組織された抽象的遂行としては、換言すれば価値を産出する労働としてはそれはシステムに属している。^③ 即ち、同一の社会領域（第一の思考方向の下で考えられた経済システム）が一つの観点（参加者のパースペク

ティヴ)からすれば、生活世界として、他の観点(観察者のパースペクティヴ)から見れば、行為の機能的・システムの連関としてシステムとして見られている。こうして、(経済)システムとは、ここでは、抽象的労働の機能的連関に他ならず⁽⁴⁾、それ故、ウェーバーの言葉で言えば、経済的秩序界(経済システム)に二つの側面が措定される。(見られるように、「システム」概念も二義化される)ここで生産者の生活世界の物象化は、システムによる生活世界の浸食の結果というテーゼが維持されるかぎり、具体的労働の抽象化として、即ち、抽象的労働の機能連関への具体的労働の同化として理解される。しかし、注意すべきなのは、この場合、具体的労働がそれ自身で同時に抽象的労働へと転化していることが物象化とされるという点である。以上二つのことの間には、微妙だが、本質的な差異がある。ハーバマースの場合、システム論理の生活世界への浸食によって、生活世界がシステムの下に従属されるということによって物象化が説明されるために、抽象的労働の機能連関は、それ自体では物象化的存立構造を有するものとは決して捉えられない。物象化は、むしろ抽象的労働のそうした機能的連関が具体的労働を己のもとに服属させることによって生じる。すると、再び物象化の推進メカニズムの説明に際して困難が生じるように思われる。それ自体では何ら物象化的存立構造を有しない抽象的労働の機能的連関としてのシステムは何故にますます(生産者の)生活世界を浸食するという制止不能な固有の力学を展開するのであろうか。ハーバマースの思考枠組(システムと生活世界という社会の二層的把握及びシステムによる生活世界の植民地化のテーゼ)の下では、剰余価値を吸収することで増殖する資本物神の定立は、むしろ、システムによる生活世界の浸食の結果として把握されざるを得ないであろうし、物象化の説明のために経済システムの自己推進力は所与として前提されざるを得ないであろう。ハーバマースの考えでは、この自己推進力のおかげで、経済システムは、政治・行政システムたる国家の介入主義的調整を媒介としつつ、諸個人の消費者及びクライアント役割を通路として生活世界を植民地化するに至るのである。

以上に見た物象化の推進メカニズムの説明上の如上の困難並びに「生活世界」と「システム」概念の絶えず現われてくる二義性というハーバマースの基本概念レベルにおける混乱は、私見では、体系的に生みだされたものである。即ち、それはシステムと生活世界による社会の二層的把握という採用された枠組に由来するのである。特に重大なのは、この枠組はシステムから社会抗争の固有の次元を抜き去るように思考に体系的な圧力を加えるという点であり、それ故にまたシステム自体に物象化的存立構造を認めないように圧力を加えるという点である。

註

- (1) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 503. (邦訳 (下) 340 頁)
- (2) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 503-4. (邦訳 (下) 341 頁)
- (3) Vgl. J. Habermas : TkH, Band 2. S. 494. (邦訳 (下) 331 頁)

7 「システム」と「生活世界」による社会の二層的把握の現代世界の認識 にとっての意味

システムと生活世界というこの思考枠組が現代世界の認識にとって持つ意味は、二重である。即ち、それは第一に、戦後資本主義世界における、ケインズ型政策の成功による高度成長と共に生まれてきた資本主義社会の実状を把握している。国家は財政・金融政策その他を通して積極的に経済過程に介入するに至り、資本蓄積の諸条件を計画的に整備すると共に、完全雇用と社会保障政策によって勤労・労働階級を体制内化する。資本蓄積の要請と勤労国民の生活向上という二律背反的命題は資本主義的成長の中でそれなりに解決される。戦後資本主義の高度経済成長は、完全雇用と社会保障を柱としたが、これを通して勤労国民の政治的支配機構に対する合意調達が行われた。ハーバマースの理論はこの事態を考慮に入れている。ハーバマースの後期資本主義社会とは成長型の、あるいは福祉国家型の社会である。ハーバマースは、現代資本主義国では一方で、生産過程に直接参加している階層があり、これが社会の中核を成していると言う。⁽¹⁾ この

階層は、資本主義経済成長を労使の妥協の基盤としてこれを擁護する階層である。他方で、この階層の周辺に多様な集団があって、この周辺部に入る人々は、生産業績主義の周辺部に位置しているがために、経済成長が惹起する破壊的作用に対して極めて敏感な人々である。ハーバマースにおいて、システムによる生活世界の植民地化に対して抵抗する批判的主体は誰か。それは、この周辺部にいる人々である。『古い政治』がどちらかと言えば、企業家や労働者、商工業を営む中間層に支持されているのに対して、『新しい政治』は新中間層や若い世代、そして専門的知識を身につける高等教育を受けた様々な集団にかなり強い支持を持っている。^② 抵抗運動を突き動かしているのは都市環境の破壊、環境破壊、破壊的な工業発展、風土の汚染、等であるが、抵抗運動の主体を形成しているのは、決して社会の中核をなしている、即ち生産過程に直接参加している労働者ではなく、かの周辺部に属する人々である。「アルタナティブが矛先を向けているのは……職業労働の道具化、市場に依存した労働の現金化であり、競争や成績による締め付けが小学校にまで及んでいる事態である。」^③ こうした批判的諸主体が目指しているのは、政治的及び経済的システムの固有の力学の一部を取り外して、それを生活世界化するという「反制度」とであるとされる。この反制度の主張において、しかし、現代に特有のあるアルビヴァレントな性格が現われて来る。即ち、批判と抵抗の主体はもはや社会の中核部を形成しているとされる人々ではなく、それ故、批判的諸主体はいわば「外」から経済的及び政治的システム固有の力学を一部解除し、それを生活世界化すると主張することにならざるを得ない。ハーバマースは言う。

「発展段階にある資本主義社会の特徴となっていた階級闘争が、社会国家的大衆民主主義の中で制度化され、そのことによって鎮静化されたという事実は、抵抗の潜在力そのものが鎮静化されたことを必ずしも意味しない。抵抗の潜在力は、実は、別の抗争ラインで、もし生活世界の植民地化というテーゼが正しいとすれば、そこでは今日でも抵抗運動は起こり得るのである。」^④

抵抗の潜在力が今日においても枯渇していないということは、しかし、

物質的再生産の領域では枯渇してしまったということと矛盾するものではない。このような状況は、ドイツのみならず世界資本主義システムの中核を成すヨーロッパ先進工業諸国家と同様、この中核の一翼を担う日本において共通の現象である。ここではハーバマースが描いている後期資本主義の状況は、高度成長期に現出してきた日本社会の状況に平行している。確かに、日本における労働者の状況については、企業統合の側面が強く^⑤、ヨーロッパ先進諸国では福祉国家型調整が基本であるとしても、その共通性もまた看過できないものである。以上の点からすれば、システムと生活世界という社会の二層的把握が理論上招来する、システムからの社会抗争の固有の次元の捨象は、戦後に高度成長を経験した先進資本主義諸国で現出した社会状況に正確に照応していると言えよう。この意味で、ハーバマースの理論はケインズ主義的政策を遂行する介入主義国家の戦後期における（一定の）成功＝急速な資本蓄積＝経済成長という一つの歴史時代に密着し、それを反映している。

とはいえ、この理論は同時に、その基本概念レベルでの先行的決定を通して、この歴史状況を理論的に固定している。この理論は、一定の歴史状況を所与として受け止め、それを理論化しているが、しかし、この歴史状況が解体する可能性を組み込んではいないように思われる。高度成長が終息し、ケインズの政策遂行が破綻する時、もはや経済成長を通して労働者の生活向上要求の充足と企業システムの資本蓄積要求という二律背反的命題を解決することが困難になる時、国家が公共事業を民営化し、賃金抑制と高額所得者への減税・新たな大衆課税を強行しようとする時、様々な商品が織り成す商品世界の華やかな現象諸形態の下で、企業システムが過労死を頻発させるほどの長時間・過密労働、労働強化を通して資本蓄積を強行しようとする時、企業システムそれ自体の中に批判と抵抗の潜在力も蓄積されざるをえない。（勿論、この抵抗の潜在力が批判の現実の運動として生じてくるのかどうか、あるいはどの程度生じてくるかは、諸主体の力量や歴史的に形成された主体類型^⑥を含めて、その都度の様々の諸条件によって規定されている。）

「システム」と「生活世界」概念による社会の二層的把握の妥当性

けれども、ハーバマースの理論はまさしくその生活世界とシステムという社会の二層的把握を通して、システム自体から社会抗争の次元を捨象することによってこの可能性をあらかじめ理論から除去してしまうように思われる。

実際、ケインズ主義的政策に依拠する介入主義国家の政策は、1973年の石油危機と共に破綻し、高度成長は終息するに至った。これに続く1974-5年の世界同時不況の中で、ケインズ主義的政策の破綻は、不況とインフレーションの同時進行という形で目に見えるものとなった。日本では、この不況時以後、1970年代末に大合理化及び生産点での機械化・情報化・ME化が進行する時代がやって来るが、その際、高度成長の過程で形成された労使一体を旗印にする労働組合といわゆる日本型労使関係は積極的にこの傾向を促進する役割を果たした。そして、資本主義国家は若干の模索の後、経済構造再編と国家機構の再編に乗り出すのである。それは、資本の高蓄積の諸条件を維持しながら、社会保障、福祉等を切り捨てて行くことであり、公共事業を民営化し、いわゆる小さな政府を標榜するものである。これは勤労国民との矛盾を一層蓄積せざるを得ないし、またこのために生じてくるであろう社会運動をあらかじめ押え込むため警察力は強化され、国家は「危機管理国家」として権威主義化される傾向⁷⁾が生じてくる。

しかし、このことは一層危機管理国家化した国家と国民との矛盾を激化せざるを得ないものである。また経済構造調整の名による賃金抑制、生産基地の海外移転に伴う労働雇用の流動化等、並びに長時間過密労働の強化は企業システムそのものの内部で一層矛盾を蓄積する。即ち、企業・経済システム内部に批判と抵抗の潜在力が蓄積する。勿論、このような趨勢は1980年代以降先進資本主義諸国で顕著になってくるのであって、1981年に出版されたハーバマースの『コミュニケーション的行為の理論』がそうした趨勢を考慮に入っていないのは当然である。けれども、理論の基本概念レベルで、以上の趨勢を概念把握する手段が予め排除されてしまったことが問題なのである。(矛盾が蓄積するか、緩和するかはその都度の歴史的状況の諸条件に依存している。) というのも、システムと生活世界という二

重の基本概念の選択は、物象化をシステムによって誘引された生活世界の病理現象と論定することによって、批判と抵抗の潜在力を専らシステムと生活世界が交差する前線 (Front) に設定し、かくてシステムそれ自体から物象化概念を引き離し、またこうすることでシステム自体から社会抗争の次元を捨象させるからである。しかし、1980 年以降における先進資本主義諸国での先述の如き傾向・趨勢は、社会理論の基本概念レベルで、システムからそれに固有な社会抗争の次元をいわばア・プリオリに捨象することを許さなくなっている。この点からすれば、

「……ハーバマースは、技術の自律化という時代診断的観念及び階級的葛藤の解消という社会学的診断にあまりに強く影響されており、このために後期資本主義の現代社会において尚道德的な『階級対立の弁証法』の痕跡を発見することができなかったのだ。」⁽⁸⁾ というホーネットのハーバマース批判は経験的であると共に理論的な意義を持ってくる。理論的な意義というのは、それが「システム」と「生活世界」という対立概念の採用という理論の基本概念レベルでの選択の修正・廃棄を迫るからである。

私は以上、ハーバマース理論における諸困難、即ち「生活世界」と「システム」概念に絶えず二義性がまといつくこと、物象化の推進メカニズムの説明に際して経済システムの自己推進力をハーバマースは所与として前提せざるを得ず、この経済システムの自己推進力の説明に際して困難に遭遇するということ、更にシステムから物象化と社会抗争を引き離し、このことによって 1980 年代以降の先進資本主義諸国での歴史的趨勢の概念把握を予め遮断しているということ、こうした諸困難が体系的に生みだされたものであると述べた。即ち、それは、「システム」と「生活世界」という(対立)概念の基本概念レベルでの採用とシステムによって誘引された生活世界の物象化という理論構想に由来するのである。確かに、ハーバマースが社会抗争を専ら目的合理的に組織された行為領域とコミュニケーション的に構造化された行為領域との間の葛藤として描くのは、一方でコミュニケーション的行為を生活世界に投影し、他方で道具的行為をシステムに投影したことの結果として、単に、首尾一貫性の問題にすぎないのであ

「システム」と「生活世界」概念による社会の二層的把握の妥当性

る。⁽⁹⁾（とはいえ、このことはハーバマースが記述している様々な新しいタイプの社会運動、即ち、反核と環境保護、平和運動、対案提出者の運動、税制異義申し立て運動、父母による学校批判運動、女性解放運動といった新社会運動の意義を否定することではない。）以上の理由から私は、社会理論の構成に際して、システムと生活世界という（対立）概念の採用という先行的選択を廃棄し、別の概念枠組の探求を提案したい。

註

- (1) Vgl. J. Habermas : TkH, Band 2. S. 577. (邦訳 (下) 413 頁)
- (2) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 577. (邦訳 (下) 413 頁)
- (3) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 581. (邦訳 (下) 417 頁)
- (4) J. Habermas : TkH, Band 2. S. 576. (邦訳 (下) 412 頁)
- (5) 渡辺治「現代日本社会の権威的構造と国家」, 藤田勇編『権威的秩序と国家』所収, 東京大学出版会, 1987 年, 参照。
- (6) 例えば、資本主義経済は絶えざる技術革新への駆動力をみずからのうちに組み込んでいるが、こうして絶えず変化する労働環境に、自己の能力の開発を通して適応して行くという変化適応型主体類型は、みずからを絶えず変動する環境に合わせて差異化し、限りなくみずからを差異化させて行くということによって、むしろ経済システムの（変動的）再生産に寄与しているのである。「生活費獲得のための労働の場と、私的生活の場との両面において、労働者の生活行為の諸条件が目まぐるしく変化し、労働者にとってはみずからの生活要求の実現のためには、この次々に変化して行く諸条件に適応することが必要不可欠の条件となった。生産の技術的条件の絶えざる革新がすすむ中で労働力の販売者として生きて行くために、その絶えず変革される技術革新に適応するために労働力の絶えざる自己革新が不可欠となった。また必要生活手段の大半を商品に依存するようになり、大量生産大量消費を追求する商品供給者の側からの生活要求や生活感覚へのたえず新しい刺激にさらされ生活手段の陳腐化のサイクルの短縮化が進む中で、人並みであるためには、外からの刺激に多少とも適応することが必要となったわけである。」（真田是編『大企業社会と人間』, 法律文化社, 1988 年, 78 頁）この主体類型にあっては、古い意識と行動様式を次々に捨てるという自己差異化の運動の中で、変化そのものが体質化されるが（同上, 120 頁）、ここにみずからは様々な言語ゲームの間を自由に浮遊しているのだという幻想が生まれ、こうした変化の体質化が「かえって誇るべき優等さと錯覚されるまでになる。」（同上, 129 頁）このような差異化に継ぐ差異化という主体の運動のきっかけは、刺激・衝撃として主体の外からやって来る。主体はその衝撃をみずからに内化することを通して、即

ち、衝撃として主体に与えられる未知なるものの知を獲得することで従来の自己とは差異化された新たな自己・未知であったものを支配する能動的自己を確立したと思ひ込む (meinen) が、本当はただ変動する環境に振り回されているだけなのである。これこそがホルクハイマーが主体の物象化として語ったものである。「生存、あるいは我々に言わせれば、成功は社会が個人に課する強制への個人の適用能力に依存している。生存するためには、人間はその生活を成している混乱した困難な状況に各瞬間に適切に反応しつつ対処する機械に変身する。」(M. Horkheimer: *Zur Kritik der instrumentellen Vernunft*, S. 95) 自らと異質なものととの遭遇に際する主体の真の自己変容は主体の自己のうちへ向かっての凝集を不可欠の契機とする。差異化に継ぐ差異化という絶えざる差異化の純粹運動の中では、しかし、主体の生活実感の希薄化が進行するだけである。この主体類型にあっては、主体の世界経験は抽象化・貧困化せざるをえない。即ち、世界は抽象的な変化の絶えざる繰り返しのみの経験される。換言すれば、環境の変動だけが経験されるのであって、即ち、差異化を絶えず繰り返す諸言語ゲームの絶え間のない運動として経験されるのであって、この変動を通して再生産されるシステムの同一性、従ってまたそこに組み込まれている同一性の支配の経験はその世界経験から脱落してしまう。自らは様々な言語ゲームの範型的明証性の間の自由に移動しているのだという主体の幻想は、世界経験のこの貧困化と相即している。こうした変化を体質化した主体にとっては、差異化に継ぐ差異化の停止は恐怖の的であるが、それはこうした停止が差異化の絶えざる運動を介して再生産されているシステムの同一性にとって恐怖であるのと同様である。

以上のような差異化を絶えず繰り返す運動は、非同一性を抑圧するシステム同一性に目を止めて、即ち、それを批判的反省的に主題化し、それを批判的に超克して行く、だからまたみずからを批判的に超克する主体の自己批判性とは全く別物である。尚、K. O-アペルの「超越論的言語ゲーム」の概念は、こうした人間主体の活動を組み込んでいる。一つだけ引用する。「一切の規則遵守の原理的公共性及び一切の規則遵守と共に存立している言語ゲームと結び付く必然性にも拘らず、個人にとって、存立しているコミュニケーション共同体の中では、存立している言語ゲーム（あるいは諸言語ゲーム）の『範型』に基づいては、事情によっては事実上検証されることのできない新しい規則を導入することが可能でなければならない。理解されないすべての発明家や新しい方法的端緒の科学的発見者、しかし特に社会的規範——ウィットゲンシュタインの意味でのすべての『生活形式』とその言語ゲーム規則——の革命家の場合にそうである。」(K. O-Apel: *Transformation der Philosophie II*. Suhrkamp, 1973. S. 347.) 新たな生活形式の文法の導入は、旧来の生活形式の批判的解体を含んでおり、だからそれは主体の、即ち言語ゲーム遂行の主体の自己超出である。

アペルの超越論的言語ゲームは、主体の先取としては一切の可能な言語ゲー

ム、相互に異質な、否非共軛でさえある諸言語ゲームの相互理解の場のことである。(勿論、このことは、まさしく主体の先取としてあるものとして、一切の可能な言語ゲームの相互理解の場が実現されてしまっているなどということを意味しているわけではない。)この想定をアーペルは非歴史的にそれ自体として設定してしまっているのだが、しかしこの先取のうちには、我々は我々のとは異質などのような言語ゲームをも理解しえるのだということの原理的承認が含まれている。今、相互に異質で非共軛である二つの言語ゲームがあるとしよう。そして、ここに、この二つの言語ゲーム相互の理解のために両者に何か共通のもの(意味)がなければならないはずだとする考えがあるとし、この共通のものを「共通言語」と呼ぶとしよう。アーペルはまさしくこの「共通言語」の観念の否定から出発するのであり、それ故にこそ、彼は相互に異質なもの同士の理解という、特有の解釈学的次元に立ち入ることができるのである。もし共通言語なるものを設定してしまえば、二つの言語ゲームは非共軛ではないということになるし、異質なもの同士の理解という解釈学的次元に立ち入る必要もないわけである。その場合、共通言語は一方の言語を他方に押しつけた結果であるかもしれない。それ故、アーペルは何か同一性(共通言語のようなもの)を設定してそれには合わない非同一的なものを非合理的なものとして排除しようとしているのではなく、全く反対に、そのようなやり方を非合理的と呼んでいるのである。これがアーペルがコミュニケーションの非合理的制限と呼ぶものであり、ハーバマースがコミュニケーションの体系的歪曲と呼ぶものである。およそ不可能なことであるが、もしアーペルの超越論的言語ゲームを上の意味での共通言語と同一視するならば、この時にはアーペルが否定したり、批判したり、その否定から出発したような諸観念の一切をアーペルが主張している観念だとする転倒した理解が生み出されるのである。

アーペルの言う「人格の相互承認」は共通言語なるものをあらかじめ設定することに対する批判と関連する。この概念に含まれる内容を人は確かに人格の対等・平等性と表現して良いが、しかし、それは例えば二つの銀行が対等で合併するといわれる場合の「対等」の意味で言われているのではない。政府当局に対して対等・平等であることを掲げた中国の学生の要求は、政府当局の同一性には納まらない異質性の存在を認めよという要求に等しい。「人格の相互承認」という概念には異質なものの存在の承認という意味が含まれている。異質なものの存在の承認、ならびに異質なもの同士の原理的な理解可能性の承認がある時にのみ、異質なもの同士のよりよき理解、また異質なもの同士のぶつかりあいということも可能なのである。そうでなければ、このぶつかり合いは単に偏見の投げ合いに過ぎないであろう。こうして、アーペルの言う意味での超越論的言語ゲームはある同一性の一元的支配のことでも、一切の視点の最終審でもなく、むしろ共通言語の自明性に亀裂が走り、それが破れる時に、アーペルの言うコミュニケーション

ンの非合理的な制限が、即ち共通言語の同一性が支配している実在的コミュニケーション共同体の中に、その批判として（アーペルの言うには前進的に）生成するのである。

- (7) 加藤哲郎「現代資本主義の国家形態」，藤田編『権威的秩序と国家』所収参照。
- (8) A. Honneth : GWDA, S. 306.
- (9) A. Honneth : GWDA, S. 289.

8 言語のパラダイムと生産のパラダイムとの統合

では、我々はハーバマースの基本概念枠組の選択に代えるに、どのような基本概念枠組を選択すべきなのであろうか。

既に見たように、第一の思考方向、即ちシステムと生活世界の（イングラムの用語で言うと）「存在論的分配」（＝区別）と第二の思考方向、即ち、システムメカニズムの生活世界内的制度化（この場合には、同一の社会＝行為領域が二つの観点から、つまりシステムとも生活世界とも見られることとなる）とは相互に無効にし合う関係にある。それ故、この矛盾を解消する一つの方途は何れかの思考方向を廃棄して、いずれか一方の思考方向のみを採用することである。そこで、先ず、第一の思考方向のみを採用すると仮定してみよう。この時、システムと生活世界は社会存在論的に異なる行為領域とされるが、この場合、既述のようにシステムメカニズムが生活世界内制度として制度化されるというテーゼは無意味化される。この不整合はもはや生じないが、しかし、生活世界がコミュニケーション的に構成された世界であり、システムが貨幣ないし権力によって制御されたシステムとされるかぎり、コミュニケーション的行為と道具的行為のそれぞれ投影したものというホーネットの批判が妥当してくる。その上、これまで述べてきたように、システムによる生活世界の浸食という理論構想を採用すれば、システムから社会抗争の次元が捨象されることになり、またシステムから物象化概念が遠ざけられることになる。それでは、物象化の説明に際して、システムによる生活世界の浸食という構想を捨て、媒体に制御されたシステム自身が物象化的存立構造を有すると考えてみたらどうだろうか。けれども、この場合にも、確かにシステムが物象化的存立構造を有す

るものとして論定されるときも、生活世界とシステムが前者はコミュニケーション的に構造化された世界であり、後者が媒体によって制御される行為領域であるとされるために、システムそれ自体における、目的合理的行為システムの組織化の在り方を巡る、従ってそうした組織の規範的統合を巡る、批判的言説を含む社会闘争という次元、ホーネットが「当事主体が共通の実践の組織様式を巡ってくりひろげる闘争」⁽¹⁾ と呼ぶ批判的实践という言語ゲーム、この意味でのコミュニケーション的行為過程を主題化することができなくなる。このことはハーバマースが生活世界と呼ぶ行為領域とシステムと呼ぶ行為領域両者にコミュニケーション的行為の概念を関係づけなければならないということを意味しており、それ故また、一方で媒体によって制御された行為の機能的連関としての（あるいは同時にまた実定法を通して形式的に組織された）システムと他方で、コミュニケーション的に構造化された生活世界という相対立する「システム」と「生活世界」概念の採用は、これを廃棄しなければならないということを意味する。こうして、第一の思考方向をのみ採用することにしても、我々はハーバマースの「生活世界」と「システム」の区別を投棄しなくてはならないということになる。

次に、我々が第二の思考方向のみ採用するとしたらどうであろうか。この場合、同一の社会領域が観察者の観点からはシステムと見られ、参加者のパースペクティブからは生活世界と見られることになる。すると、生活世界はある意味で社会の全体であり続ける。というのは、媒体に制御されたシステムの生活世界内的制度化として、（実定法を通して）形式的に組織された行為領域は生活世界に所属するはずであるからである。（我々は、今第二の思考方向にのみ従って思考しているのであるから、媒体によって制御された行為の機能的連関でありながら同時に法を通して形式的に組織化された行為領域の総体をシステムとし、その外にある行為領域をコミュニケーション的に構造化されている生活世界と考えてはならないのである。）ここで経済領域を例に考えれば、同一の社会領域が一方で貨幣媒体によって制御されたシステムでありながら、同時に他方では私的法人格の相互行

為の関係態としてあることになる。この相互行為の関係態は、生活世界内存在であるから、生活世界をコミュニケーション的構造化された世界とするハーバマースの観点を採用しつづけるとすれば、私的法人格の相互関係態についても、その制度的枠組に関する批判的言説を含む社会闘争の次元を措定することは不可能でないということになり得る。しかし、システムによる生活世界の植民地化のテーゼによる物象化の説明は、システムから論理必然的に物象化概念を遠ざけざるを得ない。即ち、媒体を介して制御される行為システムは、それ自体では、何等物象化的存立構造を持たないのである。こうして、我々は、第二の思考方向のみを取って思考する場合、システム論理による生活世界の植民地化のテーゼによる物象化の説明を廃棄しなければならないことになる。こうして、以上から我々が第一、第二の思考方向のいずれをとっても、我々はシステムと生活世界のハーバマースの対置を廃棄し、ハーバマースの言う経済及び政治・行政システムと私的生活領域ならびに公共性すべてにコミュニケーション的行為を関係づけないければならないこと、またシステムそれ自体に物象化概念関係づける、換言すれば、システム自体が物象化的存立構造を有するものと考えなくてはならないということが結果する。この後者のことについて言えば、それは「生産手段と制度の分離ないし自立化がそれ自身で物象化的効果を有しているのである。社会的な自然過程はいつもまた生活世界の組織化的形成を示すからである」⁽²⁾ というダンネマンの批判が妥当する。一定の社会領域へのシステム概念の適用は、その社会領域が物象化的存立構造を有している場合、その物象化的存立構造を捨象しないかぎりにおいて正当である。即ち、一定の社会領域へのシステム概念の適用は、一定の社会領域を「システム」と呼ぶ時、その適用様式には基本的に二つの場合が区別される。一つには、社会の、例えば、経済領域の物象化的存立構造を論定し、しかる後「システム」概念を適用する場合、我々はその領域の物象化的存立構造を見失うことはない。だが、先行的に物象化的論理構造を認定することなく、我々が始めからある社会領域にシステム概念を適用し、その領域を構成する諸要素間のシステムの連関をシステム理論の援用によってつ

ける場合、我々の視野からその物象化的存立構造が脱落する。

こうして、ここに解決されるべき二つの課題が生じている。即ち、第一に、システムと生活世界のハーバマース的対置、「システム」概念と「生活世界」概念を、一方はコミュニケーション的に構成された世界、他方は、制御媒体によって規制される（あるいはそれと共に、実定法を通して形式的に組織された）社会領域という両概念の対置を廃棄し、ハーバマースの言う経済及び政治・行政システムと生活世界（私的生活、公共性）すべてにコミュニケーション的行為を関係づけること、第二にその上で、ハーバマースの言うシステムそれ自体を物象化的存立構造を有するものとして把握するということである。第一の課題を私は後期ウィットゲンシュタインの言語ゲームの哲学に依拠して解決するように試みる。ウィットゲンシュタインの言語ゲームとは単に言語行為に尽きるのではない。それは、言語及び非言語的行為と世界像の織りあわされたものであり、それは我々の生活行為なのである。更に言えば、「一つの言語を想像することは一つの生活様式を想像するということに他ならない」⁽³⁾ というウィットゲンシュタインの発言が示唆しているように、言語ゲームを遂行するということは、要するに生活行為を遂行するということであり、言語を話すという行為それ自身がまた一つの生活行為である。逆に言えば、我々の一切の生活行為はある言語ゲームの遂行である。言語は、ここでは、言語ゲームとして社会的実在となり社会を構成するものとなるのである。私は我々の一切の生活行為を通して再生産される世界を生活世界と呼ぶ。「我々の一切の日々の生活行為を通して再生産される世界」という意味での生活世界概念はハーバマースの生活世界概念とは意味が異なっている。というのは、経済及び政治・行政システムもまたそうした生活世界の一構成部分であるからである。私は我々の一切の生活行為（生活行為の遂行、これは生活過程である）を通して再生産される世界を生活世界と呼ぶのであるから、生活世界とはまずは言語ゲーム総体として把握される。経済及び政治システム自体が一つの生活世界をなす。このように理解するとき、「生活世界」概念と「システム」概念は、もはやハーバマースのように対置されはしない。私は諸言

語ゲームが相互に織りあわされて構造された生活世界をシステムと呼ぶのである。そしてこうした意味での生活世界（システム）のうちには、その組織形態を巡る社会闘争、規範的統合を巡る闘争も組み込まれ得るのである。

しかし、我々すべてがそのすべての生活行為によって日々再生産しているこの生活世界が言語ゲーム総体であり、我々の一切の言語ゲーム遂行を通して生産される世界であるとすれば、そして我々の行う一切の行為が言語ゲーム遂行であるとすれば、我々は決して生活世界の「外」に抜け出していくことはできないということになる。特定の世界像と行為様式を有する言語ゲームから構成される一定の制度、例えば、異他的なもの・差異＝非同一性を隠蔽し、抑圧する同一性として確立されている制度的枠組の批判的解体の行為というそれ自身一つの言語ゲームの遂行を媒介にして我々は既存の制度（一定の規範によって統合され、構造化された言語ゲーム）を超出することになるが、しかしこの場合、我々は言語ゲーム一般から抜け出て行くのではなく、従って生活世界から抜け出てその外に立つのではなく、新たな言語ゲーム、それ故に新たな生活世界に入りこんで行くのである。この事態は、G.フレーゲが、彼が『概念記法』（1879）を構成するに際して依拠していた基本的原理、概念に対する判断の先行性に関する比喩的説明として述べた「一つの原子はそれだけでは決して現われず、他者との結合においてのみ現われるのであり、それらの原子はその結合から即座にある他の関係へと入りこむためにのみ、離れるのである。」⁽⁴⁾ という事態と論理上類似する。原子は、この説明では、それだけで存在することはできず、それはただいつも他の原子との結合においてのみ存在するのである。上の事態はまた前期ウィットゲンシュタインが「論理が世界の限界をもう一方の側から眺めえたとき、論理がその限界をとび超えているはずである」⁽⁵⁾ と言うことによって言い当てようとした事態と類似する。論理は世界に充満しており、世界の限界は論理の限界でもある。⁽⁶⁾ してみれば、我々は世界のいわばそとに出て世界について語ることができないはずである。というのは、その場合には我々は論理の外に飛び出ているであろうか

ら。しかし、これは、ウィットゲンシュタインによれば、できない相談である。

しかし、そうすると、我々は再び、ハーバマースが批判していたあの解釈学観念論^⑦に落ち込むのではないだろうか。生活世界のパースペクティヴからは知覚されず、それ故、言語ゲームの文法には記述されない、いわば生活世界の「外」から作用を及ぼして生活世界の歪みを惹起する匿名の作用を見失ってしまうのではないだろうか。ハーバマースは次のように言う。『『理解社会学』は、社会を生活世界に編入させるのであるから、その都度の研究対象である文化の自己解釈という視座に拘束される。この内的視座は、社会文化的生活世界に外部から影響を与えるすべてのものを無視する。とりわけ文化主義的に生活世界概念から出発する理論的発想は、『解釈学的観念論』（ヴェルマー）という虚為に陥る。』^⑧ この解釈学的観念論の視野の下では、社会過程は自立的な行為主体達が共に意識的に実現しつつある社会過程という仮象のもとに現われてくる。けれども、ハーバマースによれば、行為者は行為状況を完全に支配することも彼の了解可能性や紛争を完全に支配することもできるわけでもなく、一言で言えば、歴史に巻き込まれているのである。確かに、ここではもはやシステムと生活世界のハーバマース的対置は除去されている。とすれば、もはや生活世界に作用を及ぼし、それに病理的な歪みを加える「外」をハーバマースの意味でシステムとすることはできない。しかしそれでも、生活世界を（差し当たって）言語ゲーム総体として把握することによって、これは社会理解に際して言語ゲームのパラダイムを採用するということを意味するが、そうであれば、この修正された「生活世界概念」において、再びあの解釈的観念論に我々は落ち込んでしまうのではないか、という疑念が生れてくる。

この問題は、第二の課題へと我々を導いて行く。既にシステムによる生活世界の植民地化による物象化の説明は否定されている。我々はそれ自身が諸言語ゲームから織りなされている経済（及び政治・行政）システムが物象化的存立構造を有するものと考えなくてはならない。この第二の課題を解決するために、私は再びマルクスの生産のパラダイムに立ち戻る。そ

して、このことによって言語のパラダイムと生産のパラダイムを統合するという更なる（第三の）課題が生じてくる。如上の疑念への回答は、ここでは未だ述べることはできないのであるが、言語のパラダイムと生産のパラダイムとの接合・統合という課題の解決によって与えられるであろう。こうして、私はシステムと生活世界というハーバマースの社会の二層的把握の概念枠組を言語のパラダイムと生産のパラダイムとの統合ないし接合という枠組によって取り替える。換言すれば、我々は社会を言語のパラダイムと生産のパラダイムとの統合という視点から把握しようとするのである。予め、誤解を回避するために言えば、先ず第一に、言語のパラダイムと生産のパラダイムとを統合しようと試みるという場合、物質的再生産の領域の理解についてのみマルクスの生産のパラダイムに依拠し、その他の行為領域については言語のパラダイムに依拠するというのではない。物質的再生産の領域自体が言語と生産という二重の視点から見られるのであり、それ故、物質的再生産の領域が言語（言語ゲーム）と生産という二重の側面を有するものと見られるのである。また第二に、ハーバマースは、生産のパラダイムを時代遅れとして批判するのであるが⁽¹⁾、言語のパラダイムと生産のパラダイムとを統合するという場合、ここに念頭に置かれている生産のパラダイムは、ハーバマースがそう理解し批判する「生産のパラダイム」とは意味が違っている。それ故、私は、如上の第三の課題を遂行するに当たって、ハーバマースが理解する意味での「生産のパラダイム」を予め棄却しておかなければならない。

しかし、これ以上の論述については稿を改めなければならない。私はただ、ハーバマースの社会の二層的把握の難点（と私に思われるもの）に立ち入り、ハーバマースとは別の仕方で批判的社会理論の概念的枠組を得る方向性を単に示唆したにすぎないのである。

註

(1) A. Honneth : GWDA, S. 298.

(2) R. Danneman : Das Verdinglichungsproblem und Habermas's Versuch einer

Reformlierung, S. 113.

- (3) L. Wittgenstein : *Philosophische Untersuchungen*, § 19.
- (4) G. Frege : Boole'sche rechnende Logik und die Begriffsschrift, *Nachgelassene Schriften*. hrsg von H. Hermes, F. Kambartel, V. E. Kaulbach. Hamburg, 1969. S. 19.
- (5) L. Wittgenstein : *Tractatus logico-philosophicus*, 5. 61.
- (6) Vgl. L. Wittgenstein : *ibid.*, 5. 61.
- (7) かつて行われたガダマー・ハーバマース論争において、ハーバマースの側からガダマーに向けられた批判は、この解釈学的観念論というものである。Vgl. J. Habermas : *Zu Gadamer's > Wahrheit und Methode < Der Universalitätsanspruch der Hermeneutik*, Hans-Georg Gadamer : *Rhetorik, Hermeneutik und Ideologiekritik. Metakritische Erörterungen zu > Wahrheit und Methode < Replik, Hermeneutik und Ideologiekritik*, Suhrkamp, 1980. また, J. Habermas : *Zur Logik der Sozial-Wissenschaften*, Suhrkamp, 1982. SS. 311–325.
- (8) J. Habermas : *TkH*, Band 2. S. 223. (邦訳 (下) 57 頁)
- (9) Vgl. J. Habermas : *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Suhrkamp, 1985. SS. 95–103.